

基本多義動詞の意味構造、及び習得との関係についての実証的研究

森山 新（お茶の水女子大学）

認知言語学はこれまで多義語の意味構造分析、習得研究に多大な貢献をしてきた。Lakoff の放射状カテゴリーモデル (radial category model) は意味がプロトタイプを中心に放射状に拡張、意味拡張にメタファーやメトニミーといった認知能力が動機づけに作用するとした。一方 Langacker はネットワークモデル (network model) を唱え、多義語の意味カテゴリーの構築がプロトタイプだけではなく、スキーマにもよるとした。さらに Langacker の使用基盤モデル (usage-based model) は、言語習得がプロトタイプを中心としてネットワークを形成していくカテゴリー化のプロセスであるとした。

このように認知言語学は多義語の意味構造分析やその習得研究に関し様々なモデルを示し、提言をしてきたが、課題がないわけではない。

第一に、多義語の意味構造分析においては、その分析の多くが研究者の内省に委ねられ、その結果、研究者間で見解が一致しないという問題である。第二に、第二言語習得の研究では、大まかにプロトタイプから非プロトタイプへと進むとされてきたが、第一言語習得とは異なり、第二言語習得の場合には、母語の影響などの要因を無視することができず、学習者の意味構造は母語話者のそれとどのように違うのか、また第二言語の習得でも、本当にプロトタイプから非プロトタイプへと習得が進むと言えるのかについて、十分な研究が行われているとは言い難い。

以上のような課題を克服すべく本ワークショップでは、第一に、基本多義構造の意味構造の分析、第二に、第二言語としての多義語の習得過程について、データに基づき検証することを目的とする。

第一の「基本多義動詞の意味構造」については、これまでの多義語の意味分析の課題を踏まえ、それを改善するための考察と提言を行い、それに基づき心理実験の手法を取り入れた意味分析を行う。

具体的には、発表1で森山が、「切る」をはじめとしたこれまでの研究成果を展望しながら、多義語の意味構造分析法について批判的に考察を加え、内省分析を改善するための具体的方法と、内省分析を補完する方法としての心理実験の有効性について述べる。

続いて発表2では、発表1の提言を踏まえ、大西が、日本語の多義語「みる」を例に、内省分析と心理実験により意味構造を考察する。

第二の「第二言語としての多義語の習得過程」については、まず、学習者の意味構造が母語話者のそれとどのように異なるか、なぜ異なるか、について明らかにする。続いて多義語の習得がどのように進むのか、データに基づいて実証的に検証することを目的とする。

具体的には発表3で山崎が、日本語を母語とする英語学習者と英語母語話者が持つ CUT の意味構造を比較し、両者はどこが異なるか、異なる場合それはなぜか、について考察を行う。

さらに発表4では鐘が、第二言語としての「きる」の多義の習得が、実際にプロトタイプから非プロトタイプへと進むと言えるのか、学習者の容認度と、母語話者のプロトタイプ性判断テストとを行い、習得とプロトタイプ性との相関を見ながら考察する。各発表題目は以下の通りである。

発表1 (森山) 「多義動詞の意味構造分析法の確立をめざしてー「切る」を中心にー」

発表2 (大西) 「多義動詞「みる」の意味構造ー心理実験によって内省分析を検証するー」

発表3 (山崎) 「学習者と母語話者が持つ CUT の意味構造は異なるか」

発表4 (鐘) 「L2「きる」の意味構造がその習得に及ぼす影響」

多義動詞の意味構造分析法の確立をめざして －「切る」を中心に－

森山新（お茶の水女子大学）

1. はじめに

基本動詞は言語使用において重要な位置を占めるが、その多くは多義性が高いため習得が難しい。したがって基本動詞の習得には辞書などの教材開発が重要となるが、その際に問題となるのがその多義構造の記述である。従来多義構造の分析はもっぱら専門家の内省に委ねられることが多かったが、分析結果が専門家間で一致しないことも少なくなかった。しかし語の意味はその言語共同体で共有されていてこそコミュニケーションが成り立つわけで、その意味では語の意味はその言語共同体内で同一のはずである。しかし認知言語学の観点（Langacker 2008）からすれば、そもそも脳内に表象として形成される意味構造は、それぞれの言語話者の言語使用を反映しており、それぞれの言語話者の言語使用が完全に一致するはずがない以上、脳内に形成される意味構造が同一でないのはある意味当然のことである。しかしながら、研究ごとに異なる形で提示される意味構造の差異には、その分析方法や記述のしかたなどの不備によるものも少なくなく、その不備を改善することである程度解消していくことができると思われる。また、こうした意味構造をひとたび辞書などで公開、共有する際に、辞書間で異なった意味構造を提示するのでは、それを利用する者に混乱を引き起こす可能性がある。とりわけその言語を母語としない学習者にとってはなおさらのことで、その言語共同体で共有される意味構造の典型（プロトタイプ）を提示することは意味があると思われる。

こうしたことから最近では、心理実験など、不特定多数の言語使用を反映させた意味構造研究が登場している（森山 2015）。しかしながらそこでは、内省分析、心理実験の双方に長所があると同時に、短所があることも明らかになっており、それぞれの手法でその信頼性を高めることが求められている。

まず内省分析についてであるが、研究者間でその分析結果が一致しないとはいえ、内省分析法の最大の強みは、専門家により、時間をかけて分析が行われるために信頼性が高いという点である。しかしその一方でその手法は研究者に委ねられており、確立されているとは言い難い。したがって本稿では森山（2012、2015）などの先行研究での考察を踏まえ、「切る」を例に、まず、内省分析法はどうあるべきかを考えつつその方法を改善し、研究者間の分析の不一致を少しでも少なくする。その上で、心理実験など、内省分析の課題を補完する方法を検討したいと思う。ただし、本稿は「切る」を例にしており、この結果が全ての動詞、品詞の意味構造分析に適用できるわけではない（例えば「あがる」については森山（2016）を参照のこと）。

2. 内省分析法はどうあるべきか

本章では森山（2012、2015）での考察を踏まえ、内省分析法の改善策として、第一に中心義の語義記述方法、第二に拡張の動機づけの判定方法について述べる。

2.1 中心義の語義記述

言うまでもなく中心義は、全ての拡張義の拡張の起点となる語義である。中心義の一部が何らかの動機づけに基づき拡張を引き起こすことで、新たな語義（拡張義）が生まれる。したがって中心義の語義記述は各拡張義の語義記述や、それぞれの拡張義は「どこが」「どのように（動機づけ）」拡張したかを検討していく際に非常に重要となる。しかしこれまで、語義記述法はそれぞれの研究者に委ねられていたのが実情である。

例えば動詞「切る」の多義研究には許(2008)、遠藤(2008)、森山(2012、2015)があるが、許(2008)は、本動詞「切る」を7つの別義に分け、その多義構造を分析している。それによると中心義は(1)のようなものであるとしている。

(1) <人間・動物が><一続きにつながっている><固体に対し>

<集中的な力を加えて><力を加えた位置で><分離する>

ここで問題となるのは、動詞の意味分析にあたり、実際の用例で共起する項について、十分に配慮がなされていない点である。動詞にはその用法によって共起する項が決まっており、動詞の用法とどのような項が共起するかは表裏一体の関係にある。したがって動詞のそれぞれの用法の意味を記述するにあたっては、どのような項が共起するかを重視し、それを反映する必要がある。許が(1)の例文として挙げている文は、

(2) 花子がナイフでパンを切る。

であり、項としてガ格、デ格、ヲ格が共起している。「花子」が動作主でガ格、「ナイフ」が道具でデ格、「パン」が被動作主でヲ格によって表されている。しかし、(1)の意味記述では、ガ格の意味記述には動物が加えられ<人間・動物が>となっている。また、ヲ格は<一続きにつながっている><固体に対し>と2つの意義素で示されている。さらにデ格に対応する意味記述はなく、その代わりに、<集中的な力を加えて><力を加えた位置で>が加えられている。許(2008)では、デ格に対応する意味記述がない理由について、刃物のような道具を必要とせず、デ格を共起しない用法(例えば「犬が鎖を切って逃げた。」)もあるためとしている。しかし、「犬が道具を使わずに切る」用例を典型的な用例に加える必要はない。むしろ典型的な「切る」の事態は「人」が「刃物のような道具を使う」場合であろう。そして道具を使うことが多いのであれば、典型的な動作主は「人」であろう。また、<集中的な力を加えて><力を加えた位置で>は項で示されていないことから、背景的な意味と考えるべきであり、項で示されることの多い、刃物のような道具に比べるとその重要性が高いとは言い難い。「切る」の意味記述にとってより重要な、デ格で表される項に関する意味記述がないのは問題であろう。

遠藤(2008)では「～を切る」の意味用法を「～を割る」と比較しつつ分析している。この研究では、「切る」のスキーマは(3)のようなものであるとしている。

(3) 一続きのものを力を加えて離れた状態にする

「切る」は「N1がN2をV」の構文をとり、N2の意味範疇により6つに分類している。ここで問題なのは、「切る」の多義がヲ格の意味範疇のみによって分類されている点である。もちろん、他動詞にとってどのような目的語を取るかは意味記述にとって最も重要である。しかし、他動的な事態は典型的には動作主、被動作主を表すガ格、ヲ格を必須の項とし、道具を表す項(デ格)が共起することも多いことを考えると、ヲ格のみで意味分析を行うのは疑問が残る。また、[VI]としてその他を設け、先行研究で見解が分かれることを理由にして分類を保留してしまっている。見解が分かれるからこそ、自身の見解を述べるべきであって、この点も問題が残る。

以上の2つの先行研究から見出される共通の改善点は、「切る」の様々な用例を網羅的に取り上げ、それらが共起する項(ガ格、デ格、ヲ格)を分析して多義構造を考察することであろう。

その点で共起する項に配慮した意味分析を行っているのが森山(2012、2015)である。森山(2012)によれば「切る」の中心義の意味記述は(4)のように共起する項を重視した記述となっている。語義を構成しているのは、動詞の意味と必須の項であるガ格とヲ格、及び必須の項ではないが「切る」動作において欠くことのできない道具を表すデ格である。

(4) [(意志を持つ)人]が・[刃物などの道具]で・[一続きの物]を・[(力を加えて)分断する]

このように動詞の語義記述では、動詞の意味、必須の項の意味、そして必須ではない場合でも重要度が高く、共起する可能性の高い項を優先すべきであると考えられる。

2.2 拡張義と拡張の動機づけ

拡張義は中心義の「ある部分」が何らかの動機づけに基づいて拡張したものである。したがって中心義の「どの部分」が「どのように」拡張したか、正確に記述する必要がある。さらに各語義の意味記述（内包）を正確に行うことは、語義をいくつに分けるか（外延）についての精度を高めることにもなる。それはさらに、各用例をどこに分類するか精度を高めることにもつながる。

森山（2015）では、「切る」の各語義について以下のような表を作成しているが、各語義で、動詞の意味がどのように拡張しているかが、メタファーは（ ）で、メトニミーは+で示されている。例えば語義5で「(分断する)+移動する」は「分断する」の意味がメタファー的に拡張するとともに、「移動する」の意味が付加して、意味がメトニミー的に拡張していることを示している。また、語義10の「(分断する)=力強く瞬間的動作を行う」は「分断する」の意味がメタファー的に拡張した結果、「力強く瞬間的動作を行う」という意味になったことを示す。表で左の矢印は拡張関係を示し、例えば語義6、7は語義5から拡張していることを示している。さらに動詞の意味記述において重要な、どのような項が共起し、どのような意味役割を担っているかについても明示的に示されている。これにより、語義の「どの部分」が「どのように」拡張しているか、また、用例がどの語義に分類されるべきかが明確になり、内省分析者の主観を入りにくくし、語義分類や拡張の動機づけの正確さと客観性を高めている。

表1 「切る」の意味構造

			ガ格	テ格	ヲ格	動詞
0			人	刃物等の道具	一続きの物	【分断】 分断する
↳	5		人		水・空気	【横断】 (分断する)+移動する
	↳	6	数値		基準数値	【減少】 (分断する+移動する)
	↳	7	人		目標・限界	【超過】 (分断する+移動する)
↳	10		人		カーブ・ハンドル	【断行】 (分断する)=力強く瞬間的動作を行う
↳	11		人		カード	【混合】 (分断する)+混ぜる
↳	1		人	刃物等の道具	密封した物	【切開】 分断する+開ける
↳	2		人	刃物等の道具	患部	【切除】 分断する+除去する
	↳	8	人		つながり	【中断】 (分断する+除去する)
	↳	9	人		不要部分	【除去】 (分断する+除去する)
↳	3		人	刃物等の道具	人	【殺傷】 分断する+殺傷する
	↳	12	人	(鋭い言説)	人・社会	【断罪】 (分断する+殺傷する) =断罪する
↳	4		人		書類	【発行】 分断する+発行する

注) 動詞の列の（ ）はメタファー的に意味が拡張していることを示す

3. 心理実験は内省分析の欠点を補完できるか。

内省に基づく研究の限界について辻・中本・李編（2011:15-16）では、反証的な証拠に目が行き届かない、他の話者の判断と一致する保証がない、判断が研究者の理論的立場のバイアスがかかりやすいといった点を指摘し、内省の一般性を確認するために心理実験やコーパスによる検証が有効であると述べている。森山ではこの辻・中本・李に従い、内省を補完するための方法論として、心理実験を用いている。語の多義構造分析は、まずその語が用いられている様々な例文を、その語の意味の類似性に基づきグループ（語義）に分類する必要がある。類似性の測定にはいくつかの方法があるが、森山では類似度を調べる例文数が多いため「分類法」を用い、これを解析する手法としては、最もよく用いられる「多次元尺度解析（以下 MDS）」と「クラスタ分析」を用いている。分類法とは、対象者に「切る」の様々な用例が記されたカード 28 枚を渡し、意味が類似しているカードをグループにしてもらう方法である。MDS とは対象を 2 次元や 3 次元の点で表し、対象間の類似性を対象間の距離で表す手法であり、クラスタ分析は類似性の高いものをクラスタにまとめていく手法である（辻・中本・李編 2011:116）。

その結果、MDS では stress 値などの値が悪く分析に用いることができず、クラスタ分析を用いて意味構造を考察した。図 1 が MDS、図 2 がクラスタ分析の結果であり、図 3 は内省分析の短所をクラスタ分析の長所で補完しつつ作成した意味構造図である。さらに表 2 は内省分析と心理実験各々の長所と短所をまとめたものである。それによれば、内省分析と心理実験とは、どちらが優れているといったものではなく、相互に補完することで意味構造の妥当性を高めることができるということができる。

4. おわりに

一言で動詞の意味構造と言っても、その意味拡張の仕方は動詞によって様々であり、意味分析にあたってはそうした個別性にも十分配慮して行うことも重要である。今回扱った「切る」の場合、中心義は、人が刃物を用いて行う具体的動作であり、それらが様々な動機づけにより拡張し、プロトタイプを中心とした「放射状カテゴリー」を築いているが、森山（2016）で扱われている「あがる」では、中心義は単に空間的な上方移動であり、「切る」の中心義に比べて抽象的、スキーマ的である。またそれぞれの拡張義も、こうした「上方移動」のスキーマを共有しながら拡張している。言いかえれば、「あがる」は「切る」に比べ、プロトタイプより、スキーマが意味カテゴリー構造に大きな役割を果たしており、プロトタイプが重要な「放射状カテゴリー」よりは、「スキーマ」を重視する「ネットワークカテゴリー」に近い。このように、意味構造の広がり方や語義間の関係は動詞によって異なってくる。また、「あがる」の場合、「切る」に比べると意味構造が複雑であり、それを分類することは容易ではなく、母語話者といえども分類の仕方は多様になり、個人差が大きくなる。したがって「あがる」の場合、一般の母語話者が語義の分類を行う心理実験により、どれだけ正確な意味構造を究明できるかが問題となる。したがって「あがる」のような動詞を用いて心理実験を行う際には、その点を十分に配慮し、カード分類に用いるカードを慎重に準備していかないと、期待通りの成果が上がらない危険性もある。また、森山（2012、2015）では分析の対象から漏れているが、「切る」の用例の 1 つである「十字を切る」のヲ格は、「きる」動作の「対象」ではなく、「結果」を表す「結果目的語」である。このような語義では、共起する項（ヲ格）が動力連鎖の参与者ではないため、(4)のような意味記述は難しく、別の方法で意味記述をする必要がある。このように、語義記述の方法はそれぞれの動詞、または語義によって異なっており、こうした点はそれぞれの動詞の内省分析、心理実験を行うに際し、まずもって慎重に検討し、その上で意味分析を行っていく必要があると言えるであろう。これについては、今後の課題として、分析対象の動詞を拡大していく中で、さらに考察を加えていく必要がある。

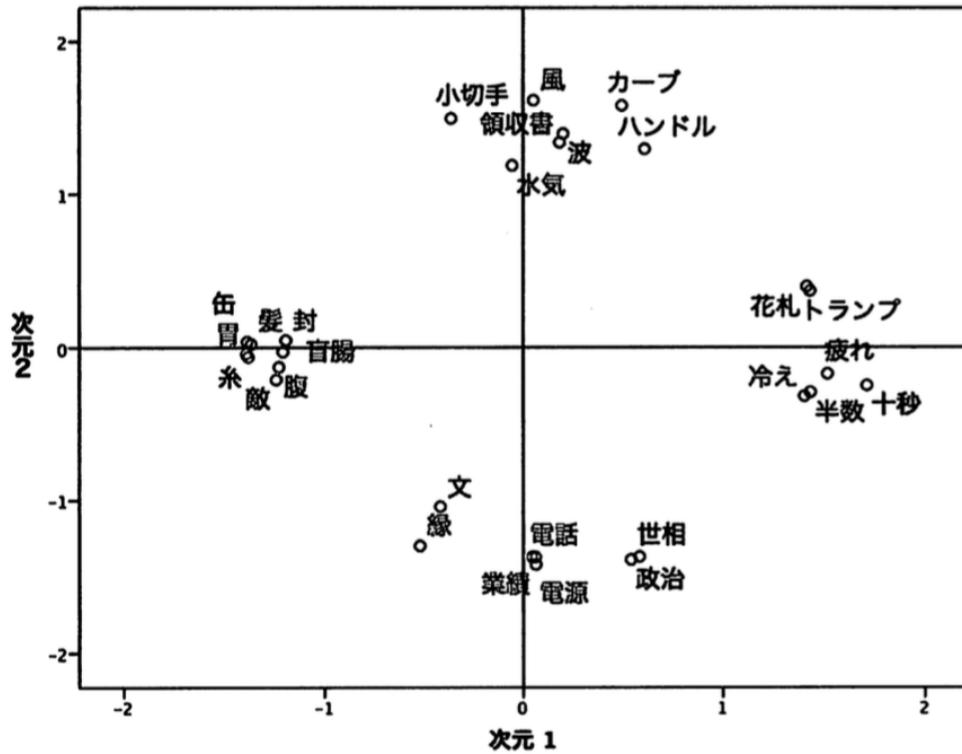


図1 MDSの結果

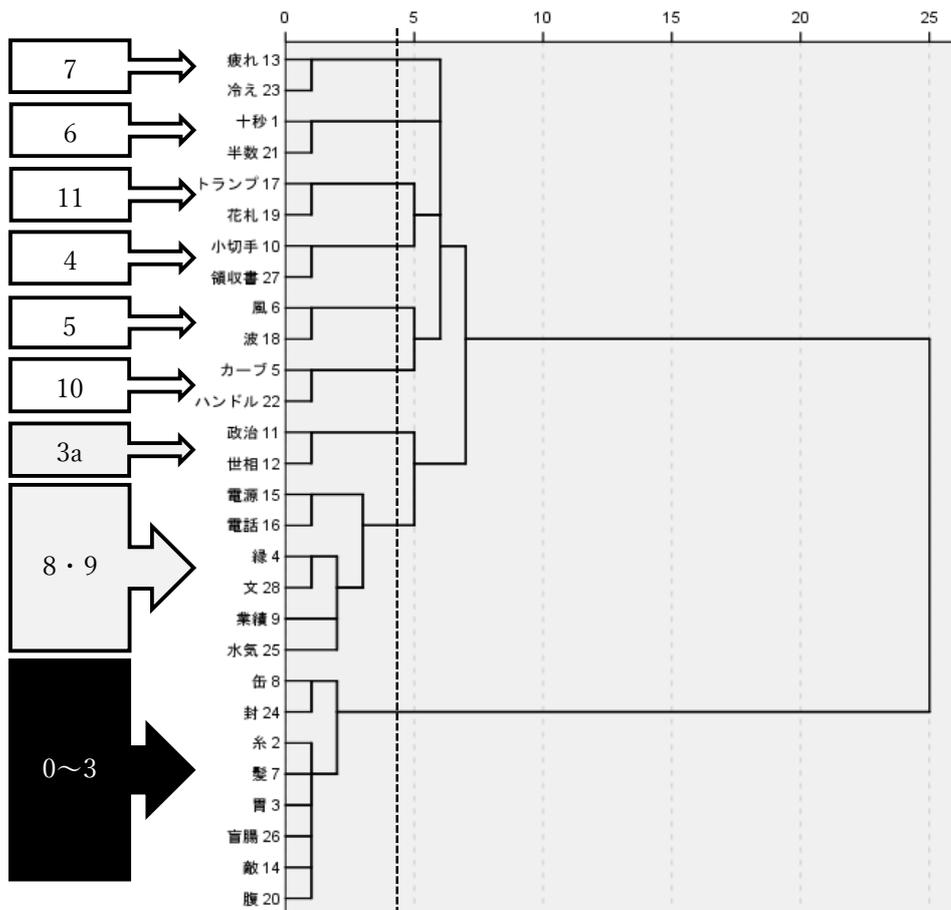


図2 クラスタ分析の結果

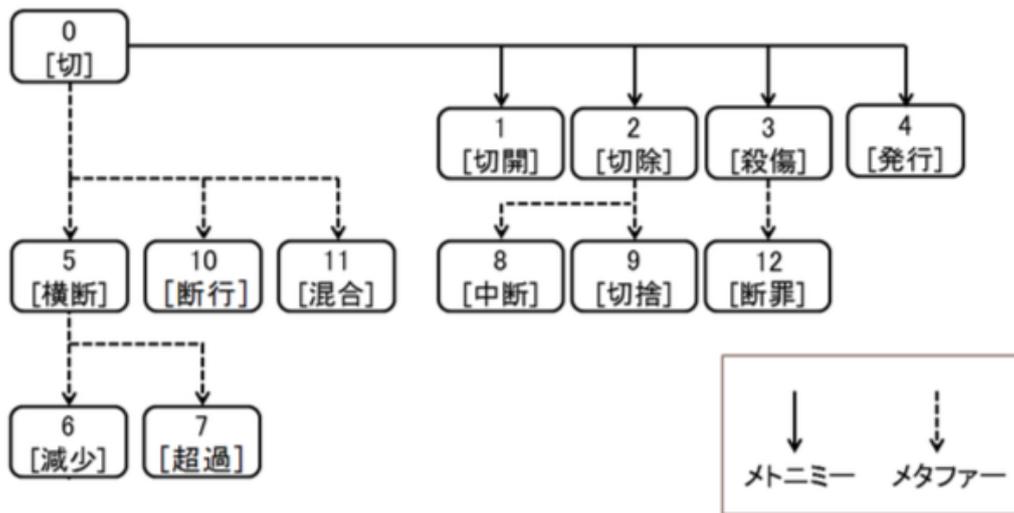


図3 「切る」の意味構造

表2 内省分析と心理実験の長所・短所

	内省分析	心理実験
長所	<ul style="list-style-type: none"> メトニミー的意味拡張など、一般の母語話者では気づきにくい意味の違いなどに気づき、分析が緻密である。 	<ul style="list-style-type: none"> 不特定多数の母語話者を対象に実験を実施することで、母語話者全体が共有する意味構造に近づくことができる。 意味拡張についての情報が得られる。
短所	<ul style="list-style-type: none"> 研究者の主観に左右されやすく、研究者間で見解が分かれる。 	<ul style="list-style-type: none"> 例文の表面的な類似点に左右されやすいなど、分析が表面的になることがある（分類のための例文選びには最新の注意が必要になる）。

参考文献

- 遠藤裕子 (2008). 「割る」と「切る」の意味拡張—数値・数量を表す用法—『拓殖大学語学研究』第117号, 57-80.
- 許永蘭 (2008). 「切る」の多義分析『言葉と文化』9, 303-320, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻.
- 辻幸夫 (監修)・中本敬子・李在鎬 (編) (2011). 『認知言語学研究の方法—内省・コーパス・実験』東京: ひつじ書房.
- 森山新 (2012). 「認知意味論的観点からの「切る」の意味構造分析」『同日語文学研究』27, 147-159, 同日語文学会 (韓国).
- 森山新 (2015). 「日本語多義動詞「切る」の意味構造研究—心理的手法により内省分析を検証する—」『認知言語学研究』1, 138-155.
- 森山新 (2016). 「上下のメタファーの観点からみた動詞「あがる」の意味構造分析: 内省分析法の確立をめざして」『人文科学研究』12, お茶の水女子大学 (近日刊).
- Langacker, R. W. (2008). *Cognitive grammar : A basic introduction*. Oxford, United Kingdom: Oxford University Press.

多義動詞「みる」の意味構造分析

大西はんな

お茶の水女子大学[院]

1. はじめに

多義動詞の習得は、母語話者であっても辞書的な定義を与えられただけでは意味・用法を十分に運用できず(Miller & Gildea, 1987)、その習得は学習者にとって困難であることが言われている(今井, 1993; Tanaka & Abe, 1984)。日本語にもこのような多義動詞は数多く存在し、また、それらの多くは「基本動詞」として初級の段階から扱われるものである。

学習者の多義語習得を困難にしている要因として、今井(1993)では、学習者が多義語の語義同士の関係性に気付いておらず、単なる同音異義語として捉えていることや、学習言語の語彙が母語の語彙と一対一対応すると考えていることなどをあげている。そこで、意味同士の関係性を意味構造図によって明示することが多義語の指導において重要であると考えられる。意味構造図の提示するために必要となるのが意味分析研究であるが、現存の意味分析研究の多くは研究者自身の内省のみによるものである。内省による意味分析では研究者が緻密に分析できる一方で、一人ないし、少数の研究者に委ねられるため、その判断が一般の母語話者と一致する保証がないといった欠点が見られる(中本・李, 2011)。

内省のみによる意味分析研究が多い中、森山(2015)では自身の内省による意味分析の結果(森山, 2012)の妥当性を心理的手法によって検証を行った。その結果、内省の結果を概ね検証でき、さらに内省の結果を補完できたとしている。

以上のことから本研究では、動詞「みる」に焦点を当て、森山(2012, 2015)に倣い、内省による意味分析の結果を心理的手法によって検証・補完し、より多くの母語話者に共通する「みる」の意味構造を提示する。

2. 内省による「みる」の意味分析

『大辞林第三版』(三省堂)に掲載されている、動詞「みる」の44の例文(「てみる」と古文は除く)をそれぞれの「みる」の意味の類似性に基づき本稿筆者が分類し、意味記述を行った。意味記述の際、森山(2012)に倣い、動詞と共に共起されるべき項についても考慮し、記述した。なお、動詞「みる」において言語化されるか否かに関わらず、必須の項は主体を表すガ格と動作の対象を表すヲ格のみであると考え、他の格については意味記述の際に記述していない。さらに、語義の記述に際して、それぞれの語義に対して利便性を考え番号を付けた。〈0〉をプロトタイプとし、そのほかの周辺の意味でプロトタイプにより近いと考えられるものから〈1〉〈2〉と番号付けをした。そうすることで感覚的に数字が大きくなればなるほど〈0〉からの距離が遠いということがわかるからである。ただし、例えば語義〈1〉と〈2〉があった場合、共にプロトタイプとの意味の近さが同じくらいであっても、ここでは便宜上、一方を〈1〉、もう一方を〈2〉といったように番号付けしていくこととする。また、ある語義から意味が拡張しているが、元の語義の意味が依然として強く残っておりその意味の差が小さいものは下位カテゴリーと考え、下位カテゴリーであると考えられる語義については〈0a〉のように元の語義の数字にアルファベットの小文字を付けることとした。

内省分析の結果が以下の表1である。その結果から作成した意味構造図が後の図3である。動詞部の記述の際にどの部分かどのように変化したかをより明確にすべく、+、=、>、≫などの記号を用いて表し

た。各記号の示すところは次の通りである。「+」は元の意味に新たな意味が加わりそちらに意味の焦点がスライドした、所謂メトニミーによる意味拡張を表す。「>」は部分で全体を表すメトニミーによる意味拡張を示す。「=」は動作の類似性つまりメタファーによる意味拡張を表す。「≫」はより一般的な表現でより特別な意味を表すシネクドキによる意味拡張を示す。

表1 「みる」の語義と意味拡張の動機づけ

				ガ格	ヲ格	動詞	動機づけ
0				人	対象	視覚で知覚する	
→	0a			人	スポーツ・映画等	視覚で知覚する+内容を楽しむ	メト
→	0b			人	文字・図等	視覚で知覚する+内容を理解する	メト
→	1			人	対象	視覚で知覚する+分析する	メト
	→	3		人	対象	視覚で知覚する+分析する+判断する	メト
		→	3a	医者	患者の健康状態	視覚で知覚する+分析する+判断する ≫診察する	シネク
		→	3b	占い師	相手の相	視覚で知覚する+分析する+判断する≫占う	シネク
	→	4		人	対象の状態 (味・温度等)	(視覚で知覚する+分析する) =視覚以外の感覚で知覚する+分析する	メタ
→	2			人	対象	視覚で知覚する+認識する	メト
	→	7		人	良くないこと	(視覚で知覚する+認識する)=経験する	メタ
	→	8		人	期待する事物	(視覚で知覚する+認識する)=実現する	メタ
→	5			人	病人・子ども等	視覚で知覚する>世話する	メト
→	6			人	勉強・仕事等	視覚で知覚する>指導する	メト

3.心理的手法による内省分析の検証

以上の内省分析の結果を、心理的手法を用いて検証すべく、本稿では日本語母語話者を対象に、プロトタイプ判断テスト(実験1)とカード分類法による類似性判断テスト(実験2)を行った。対象者は日本語母語話者30名である。

3.1 プロトタイプ判断テスト(実験1)

実験1では、対象者に「みる」を用いた一文が書かれたカード29枚を提示し、29の用例のうちで最も「みる」のプロトタイプの意味で用いられていると考えられるものを1つ選ぶよう求めた。実験に用いた用例は主に内省分析で用いた『大辞林第三版』のものであるが、対象者が「みる」の意味に着目しやすいよう、慣用的でなく、単文のものを選んだ。また、できる限り「~をみる」の形に揃える、目的語や主語の類似性に左右されないよう語彙の統制などを行った。

実験1の結果が以下の図1である。実験の結果、内省分析でもプロトタイプである<0>義に含まれていた「窓の外をみる」を選んだ対象者が48%と最も多く、同様に<0>に属していた「建物を正面からみる」も合わせると半数以上の対象者が内省と同様の用例を選んだ。また、その他に選ばれた「ドラマをみる」、「桜をみに行く」、「新聞をみる」、「グラフをみる」もいずれも<0>の下位カテゴリーである<0a>、<0b>に属するものであったことから内省の結果が概ね妥当であることが検証されたとと言える。

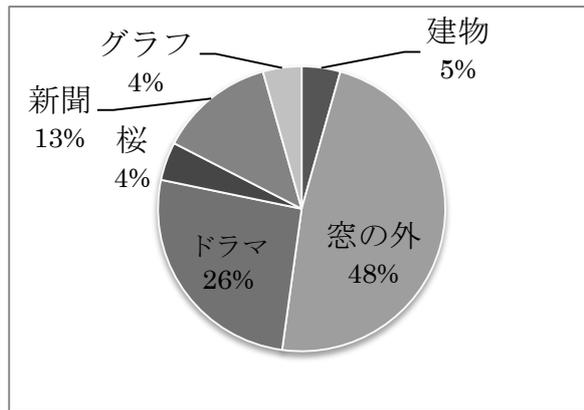


図1 プロトタイプ判断テスト結果

3.2 カード分類法による類似性判断テスト(実験 2)

実験 2 では、実験 1 と同対象者に実験 1 で用いた 29 の用例を各文の動詞「みる」の意味が似ているもの同士をグループ分けするよう求めた。得た結果から非類似性行列を作成し、クラスタ分析を行った結果が以下の図 2 である。

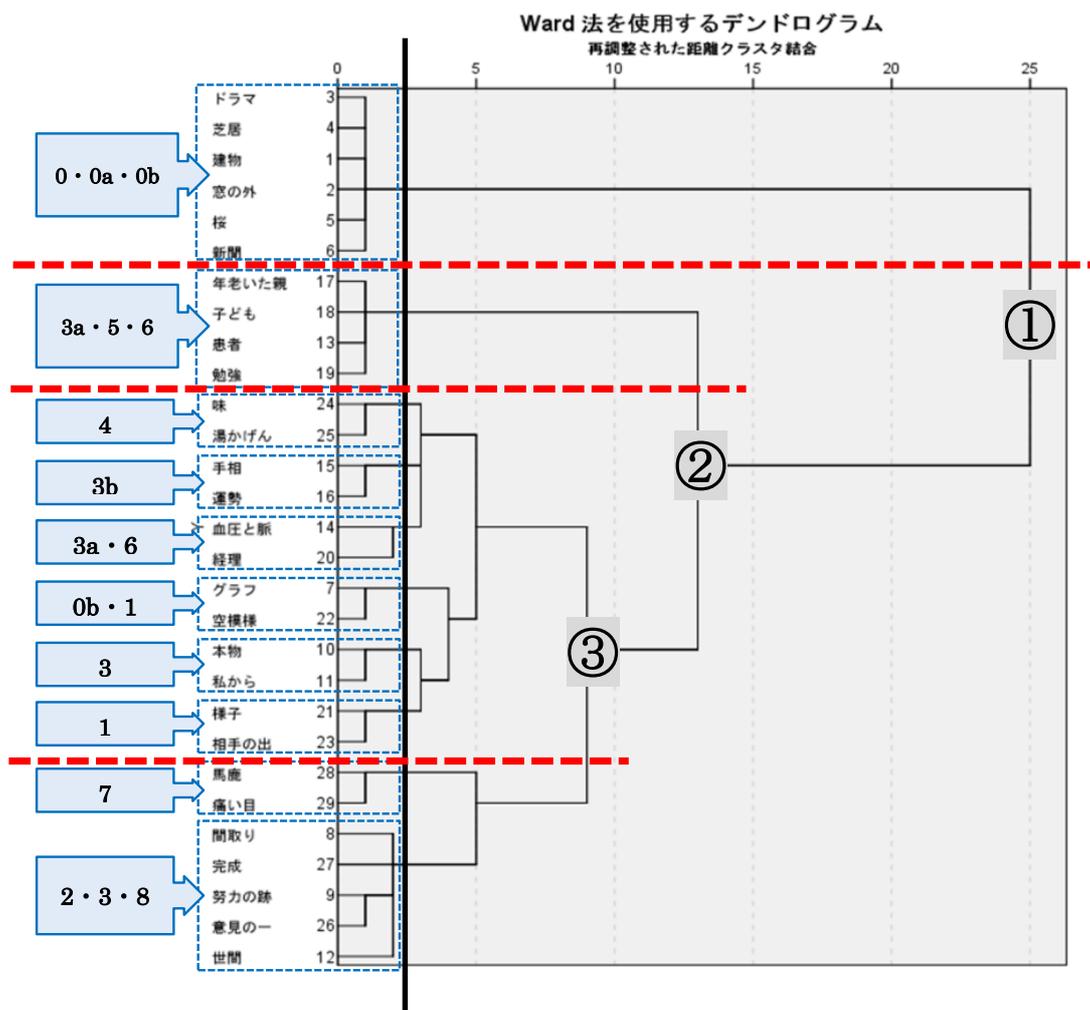


図2 クラスタ分析結果

実験の結果、半分の語義は内省と一致し、内省の妥当性を検証できたと言えるが、一致しなかったものに関しては、内省が妥当でなかったと考えられるものと、使用した用例に問題があったと考えられるものがあった。一致しなかったクラスタは主に次の5つである。

まず、〈0・0a・0b〉のクラスタに関しては、内省ではそれぞれがプロトタイプとその下位カテゴリーとして別れていたが、心理実験の結果では一つのクラスタとなっている。これは、一般の母語話者が内省ほど細く分類していないが故であると考えられるが、さらに詳細なクラスタ分析を行った結果、概ね内省と同様の3つのクラスタが形成されたことから、母語話者がこれらの語義を完全に混合しているわけではないことが言える。

次に、〈3a・5・6〉のクラスタは、どれも〈世話をする〉という意味を持つという共通点があるが、一般の母語話者間では内省ほど細分化されておらず、このような結果となった可能性が考えられる。

次に、〈0b〉、〈1〉のクラスタでは〈分析〉の意味をもつ「みる」中でも特に分析という動作を行うにあたって「視覚を主に用いるもの」が分けられ別のクラスタが形成されたと考えられる。

最後に〈3a・6〉のクラスタと〈2・3・8〉のクラスタに関しては、目的語の語彙の日常での馴染みが薄かったり、慣用的であるといった、用例の問題が考えられる。

次に、〈3a・6〉のクラスタについて見てみる。ここでは〈3a〉の「血压と脈をみる」と〈6〉の「経理をみる」が一つのクラスタを形成している。どちらも専門的な知識を要するという共通点が考えられるが、ここでは「経理をみる」という用例自体の問題があった可能性も考えられる。対象者の多くの大学生、大学院生に「経理」という語のなじみが薄くグループ分けの際に動詞「みる」の意味のみに着目しにくく、どういったグループに分類するのか対象者によってかなりの揺れがみられたことが要因であると考えられる。非類似行列を見てもそのことが窺える。

最後に、〈2・3・8〉のクラスタを見ていく。ここでは、〈2〉「努力の跡をみることができる」、「この間取りは昔の農家に多く見られる」と〈3〉「世間を甘く見る」、〈8〉「完成をみる」「意見の一致をみる」が一つのクラスタを形成している。「世間を甘く見る」は内省では〈3〉の語義に分類されるが、ここでは「この世の中は簡単」だという結論が得られたことから、〈2〉や〈8〉との「結果として得られる」という共通点が見出され、このクラスタに属しているのではないかと考えられる。同時にこのような結果になったのは目的語の類似性に左右された可能性も考えられる。特に「努力の跡」「完成」「意見の一致」は、どれも「苦労が伴う」という目的語の性質の類似性によって分類されたとも考えられる。また、「世間を甘くみる」は非類似性行列を見ても、対象者によって分類に揺れが見られた。これは「甘くみる」自体が慣用的であるがために「みる」のみの意味に焦点を当てられなかったからではないかと考えられ、用例が適当でなかった可能性があると言える。

このように内省と一致しない部分もあったが、クラスタ分析をおこなったことで、「みる」の意味が大きく4つに分類できることがわかった。①、②、③の大きな分岐に注目してみると、「みる」の意味は『プロトタイプ』、『分析』、『世話』、『経験』の4種類に分類できると考えられ、内省の結果も概ねこの4つに分類できるところから、内省が母語話者の判断と全く一致しないわけではないことが言える。

4. まとめ

以上の実験の結果を踏まえて内省分析の結果(図3)に修正を加えたものが以下の図4である。内省と完全に一致、又は、概ね一致しているものに関しては内省の記述をそのまま用いた。内省の結果と心理実験の結果に相違が見られたものに関してはそれぞれ以下のように検討した。

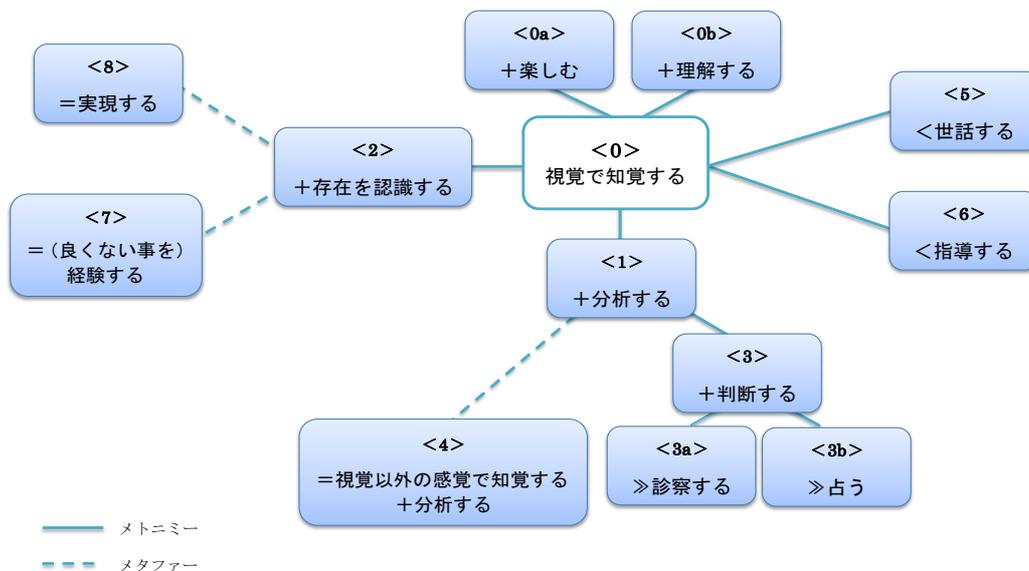


図3 「みる」の意味構造図 (内省)

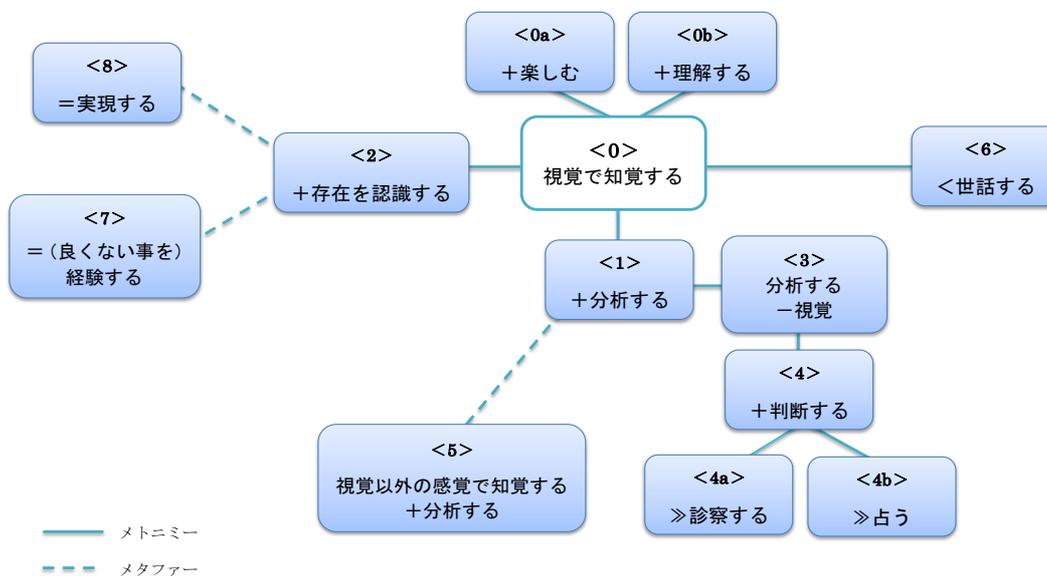


図4 「みる」の意味構造 (内省+心理実験)

まず、<0・0a・0b>のクラスタであるが、心理実験の結果ではこれらは一つのカテゴリーにまとまっていたが、さらに詳細な分析の結果、概ね内省に近い分類がなされており、一般の母語話者でも<0a>、<0b>の意味の焦点が<0>からわずかにずれていることに気付き意識している人もいるとして、<0a>、<0b>は下位カテゴリーとして存続させることとした。

次に、<0b・1>のクラスタについて考える。先にも述べたようにここではどちらも視覚を主として用いる「分析」の意味があるため、<0b>の「グラフをみる」と<1>「空模様をみる」が一つのクラスタを形成したと考えられる。ここでは、この<0b・1>を<1>と分けて考え意味記述することとし、<視覚による分析>を<1>、視覚が背景化されてしまった<分析>を<3>とした。

次に、<3a・5・6>のクラスタについては、内省では<5>を「世話をする」、<6>を「指導する」のように分けていたが、どちらも広く<世話をする>という意味に捉えられると考え、<5>、<6>は一つにまとめることとした。<3a>の「患者をみる」に関しては、「患者=病気や世話などで世話が必要な

人」と考えればこのクラスタに属していることも理解できるが、「患者」は「病院で医者に診察してもらう人」であり、やはり「患者をみる」には<世話をする>よりも<患者の体の状態からどういった病気やけがなのか、どういった治療が必要なのかを分析し、判断する>という意味合いが強いと考え、<3a>の「患者をみる」は内省の通り<3a>の「血圧と脈をみる」と共に<診察する>という語義に属すると考えた。(<視覚で分析する>という語義が加わったため<診察する>は<4a>となる。)

次に、<3a・6>のクラスタについてであるが、ここではまず、<6>の「経理をみる」という用例に問題があったと考えられるため、この用例については省略し、「血圧と脈をみる」に関しては、分析するには医療的な専門知識が必要であり、ここでの「みる」は<診察する>という意味を持つと考え、「患者をみる」とともに<4a>の<診察する>に属すると考えた。

次に<2・3・8>のクラスタについて考える。先にも述べたように用例自体の問題があった可能性や、目的語の類似性に分類が左右された可能性が考えられるためここでは内省に従うこととした。

以上の検討から提案するのが図4の意味構造図である。検証の結果によって、内省による分類の結果が必ずしも一般の母語話者と一致するわけではないということが明らかとなった。中本・李(2011)や森山(2015)でも既に指摘されているように、内省分析だけでは十分ではなく、心理実験による検証の必要性を改めて指摘したい。心理実験によって内省分析の結果を検証し、修正・補完することによって、より多くの一般の母語話者に共通した意味構造を提示することが可能となったのではないかと考える。

しかし一方で、心理実験にも問題点が残る。すでに森山(2015)でも指摘されているように、一般の母語話者を対象とした分類実験では分類が表面的になりがちである。森山(2015)の指摘を踏まえ、本稿においても用例の選出には細心の注意を払い、修正を加えるなどしたが、依然としてそのような傾向が見られ、不十分であったと言える。用例の選出と用例に用いる語の選出が今後の課題である。

参考文献

- 今井むつみ(1993)。「外国語学習者の語彙学習における問題点—言葉の意味 表象の見地から—」『教育心理学研究』41, 245-253.
- 田中聡子(1996)「動詞「みる」の多義構造」『言語研究』110, p. 120-142.
- 中本敬子・李 在鎬編(2011)『認知言語学研究の方法』辻幸夫監修. 東京: ひつじ書房.
- 松本曜(2003)『認知意味論』大修館書店
- 森山新(2012)。「認知意味論的観点からの「切る」の意味構造分析」『同日語文学研究』27, 147-159, 同日語文学会(韓国)。
- 森山新(2015)。「日本語多義動詞「切る」の意味構造研究—心理的手法により内省分析を検証する—」『認知言語学研究』創刊号(近日刊)。
- 検証する—」『認知言語学研究』1, p. 138-155.
- Lakoff, G (1987) *Woman, fire and dangerous things: What categories reveal about mind.* Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, R. W. (2008). *Cognitive grammar : A basic introduction.* Oxford, United Kingdom: Oxford University Press.
- Miller, G.A. & Gildea, P. (1987) “How children learn words.” *Scientific American*, 257, p. 94-99.
- Tanaka, S & H, Abe (1984) “Condition on interlingual semantic transfer.” On TESOL ‘84: A brave new world TESOL. eds. Larson, P., Judd, E.L. and Messerschmitt, D.S. Washington, D.C.: TESOL, p. 101-120.

学習者と母語話者が持つ CUT の意味構造は異なるか

山崎香緒里
お茶の水女子大学[院]

1. はじめに

本研究では、日本の英語教育場面でも早い段階で扱われる基本動詞“CUT”について、日本語を母語とする英語学習者（JEL）と英語母語話者（ENS）の持つ意味の特徴を比較し、それぞれに特徴的な意味のとらえ方を、認知意味論の立場から考察することを目的とする。

認知意味論では、多義語は、一つの言語形式に、二つもしくはそれ以上の関連のある意味が対応しているもの（“Polysemy is commonly defined as the association of two or more related meanings with a single linguistic form.” Taylor, 2012:219）であると定義づけられている。そして、その関連づいた複数の意味は、プロトタイプを中心として、動機づけにより拡張した、放射線状の一つのカテゴリーとしてとらえることができると考えられている（Lakoff, 1972）。意味拡張の動機づけには、メタファー、メトニミー、シネクドキーが用いられている（テイラー&瀬戸, 2008）。多義語の意味が、プロトタイプを中心とした、放射線状ネットワークを形成しているという仮定に基づいて研究を行うことで、JEL と ENS の意味のとらえ方を、具体的に示すことができ、語彙教育に貢献できる可能性があると考えた。

多義研究を語彙教育に活かそうとすれば、目標言語（L2）の意味をどのように示すのか、学習者と母語話者のとらえる意味はどのように異なるのか、という二つの問題は重要である（松田, 2004）。前者の問題に関しては、多義語の意味分析を行う際に有効とされる心理実験（森山, 2015）は取り入れているものの、瀬戸編（2007）が、複数の英語動詞について、内省とコーパスを用いた詳細な記述を行っている。後者の問題に関しては、今井（1993）が、英語動詞（WEAR）についての研究を行っているが、意味分析を念頭に置いた研究ではなかったため、WEAR の使用のうち、限られたもののみが扱われていた。そのため、事前に WEAR にどのような使用が許されているのかという調査や、内省分析は行われなかった。

そこで、本研究では多義性の高い基本動詞 CUT を例に、まず、瀬戸編（2007）をもとにして、CUT にどのような使用が許されるのかを確認し、内省による意味分析を行った。その後、意味記述に ENS の持つ CUT の意味を反映することができると考え、内省分析の際に用いた例文をテスト文として用いた、心理実験を行った。内省分析の結果と、心理実験のデータをクラスタ分析した結果から、CUT の意味をどう示すのかについて、再検討した。その後、JEL にも ENS と同様に心理実験を行い、クラスタ分析を行った。心理実験で得られた、ENS と JEL のクラスタ分析の結果を比較し、その違いがどのようなものであるかを示すよう試みた。心理実験には、今井（1993）、森山（2015）と同様に、カード分類法による類似性判断テストを用いた。ENS と JEL の CUT に関する知識の比較から、それぞれの多義語 CUT の知識は、どのように示すことができるのかを検討し、両者の異なる点については、その原因が何であるのかを考察した。

2. 先行研究

今井（1993）は、母語話者は、多義動詞を一つのカテゴリーとして理解しているのに対し、学習者は、カテゴリーとしてはとらえておらず、意味拡張の動機づけであるメタファーについても理解していないと述べている。そのために学習者は、L2 の語を、L1 の対応語との一対一対応で理解しようとし、学習者にとって、L2 の多義動詞の習得が困難なのではないかと仮定した。その仮定に基づき、英語母語話者と日本語を母語とする英語学習者に対して、類似性判断テストによる心理実験を行った。心理実験には、対象語彙の WEAR を含んだ文が使用された。その際、テスト文には、日本語の対応語とされる「着る」の用法を考慮に入れ、日本語「着る」では各々異なった動詞を使う用法（wear a dress, shoes, ring, skirt 等）、髪型、口ひげ、メイクアップを目的語にとる用法（wear hair, mustache 等）、「古くなってすり減る」という比喩的用法（The tape is wearing thin. 等）、比喩的

用法から派生、転嫁した前置詞を伴う用法 (wear away, wear off 等) の、合わせて 17 の正文が用いられた。

心理実験により得られたデータを、クラスタ分析した結果、母語話者と学習者の形成した意味表象は、大まかなレベルで見ると、大差がないものの、細かなレベルでは、差があることが示された。具体的には、両者ともに、テスト文を、字義的な表現と比喩的な表現の二つに分け、字義的表現をさらに「身に着けるもののクラスタ (dress, ring, cap, shoes, skirt など)」と「装うもののクラスタ (hair, smile, mustache など)」に分けるという、大まかなレベルで近似していた。しかし、より細かなレベルでは、母語話者の方がまとまりのあるクラスタを形成しており、学習者は、まとまりがなく、L1 にも影響されたクラスタを形成するという結果であった。学習者の分析結果には、字義的な表現のクラスタの中に、英語母語話者の分析では形成されなかった、日本語の対応語とされる「着る」で表せる表現のクラスタ (wear a dress, wear a uniform など) を形成しており、L1 の影響が見られた。比喩的な表現のクラスタでは、母語話者のクラスタには、プロトタイプを中心としたカテゴリー構造が見られたのに対し、学習者のものにはそのような構造が見られないという違いがあった。

この研究により、英語の多義動詞 WEAR について、母語話者と異なり、学習者は、細かな構造を持つことができず、一部では、L1 に影響を受けている可能性があることが示された。ただし、今井 (1993) は、WEAE の意味をどのように示すのかについては研究目標に定めていないため、WEAR が実際どのように使用されているのかについての調査や、複数の意味の関連性を仮定する、内省による意味分析は行っていない。

3. CUT の意味分析

本研究では、先行研究を踏まえ、まず、CUT がどのような意味で用いられているのか、また、それらの意味をどのように関連づけることが可能なのかを、内省分析によって整理したあと、心理実験を行った。

3.1 では、まず瀬戸編 (2007) の内省による CUT の意味分析を示す。その後、それをもとに、複数の辞書に記載があるにもかかわらず、瀬戸編 (2007) では、分析対象になっていなかった用例を加え、森山 (2015) の記述方法に従い整理したものを示す。3.2 では、3.1 で用いた例文をテスト文として行った心理実験の結果を踏まえ、瀬戸編 (2007) をもとにした内省による意味分析が、どのように修正されるか考察する。ただし、修正を行う際、内省と心理実験の結果が食い違った場合、どのようなときにどちらを採用するかという基準は先行研究でも定まっていない。また、どちらも間違っている可能性は初めから排除される。今後、どのように心理実験を用いるかについては、改めて検討する必要がある。

3.1. 内省分析

瀬戸編 (2007) は、英語多義動詞について、内省とコーパスを用いた、詳細な記述を行っている。本研究で扱う、CUT についても、記述されている。その記述を示したのが表 1 である。しかし、その記述には、動詞の意味分析には重要とされる項の記述 (森山 2012, 2015) が抜けていたり、メタファーやメトニミーなどによる拡張が、どこで起こっているのかの記述が不十分であったりした。また、他の多くの辞書に記載があるにもかかわらず、扱われていない意味もあった。そのため、瀬戸編 (2007) の記述をもとに、調査者が、欠如していると考えられる意義 (<0c><1e>) を加え、森山 (2015) の記述方法に倣い、動詞に共起する項を書き出し、拡張関係を示した (表 2)。表 2 には、左端に数字の列が 3 つあるが、一番左の列にある<0>がプロトタイプであり、真ん中の列にある、<1>、<2>は、<0>からのメトニミーによる拡張、<3>は、<0>からのメタファーによる拡張であると考えられることができる。大きくは、これらの、<0>、<1>、<2>、<3>の 4 つを拡張元としたクラスタができることが示されている。そして、さらにそこから、右の列のように、<0>の下位分類である<0a, 0b, 0c>、<1>の下位分類である<1a, 1b, 1c, 1d, 1e>、<2>の下位分類の<2a, 2b, 2c>、<3>の下位分類である<3a>が、それぞれ拡張していると説明できることを示している。

表1 瀬戸編 (2007) における CUT の意味分析

		意味分析		
0		<物を> (鋭利な刃物で) スパッと切断する		John cut the lamb in half.
0a		<電気・音など(の流れ・連続)を> 切断する	メタ	Bill cut the engine.
0b		<国・組織などを>(他の国・組織などから)切断する	メタ	George cut his thumb on a keen piece of glass.
1		<人・刃物が><身体など(の表面)> を傷つける	メト	Daisy fell and cut her head above the right eye.
1a		<言葉・行動などが><人(の気持ち)を> 傷つける	メト	Justin's mockery cut Eve to the heart.
1b		<レコードに>溝を切り込む	メタ	The singer cut the first disk in 2000.
1c		<ベルト・地形などが>(場所に)食い込む	メタ	The sea cut sharply into the land and the cliff collapsed.
1d		<音・言葉などが>(知覚などに)割り込む	メタ	Emma's voice cut directly into Roy's thoughts.
2		<物(の余計な部分)を>切り取って整える	メタ	Nicolas cut a diamond into a brilliant.
2a		<形を>余分な部分を切り取って作る	メタ	Tom cut small square holes.
2b		<映画・作品(の余分な部分)などを>切り取って整える	メタ	Oscar cut the scene from the new film.
2c		<人員・経費・時間(の余分な部分)などを>切り取って整える	メタ	Michelle cut her staff at the Tokyo office by 5 percent.
3		<場所を>切るように分ける	メタ	Hanna cut winding canals.
3a		<寒風・声などが>切り裂く	メタ	A cold wind cut slowly across the graves.

表2 森山 (2015) に従い整理した CUT の意味分析

		主格	目的格	動詞	動機づけ
0		人	対象	切断する	
	→ 0a	人	流れ・連続	(切断する) = 止める	メタ
	→ 0b	人	関係	(切断する) = やめる	メタ
	→ 0c	人	決まった予定	(切断する) = サボる	メタ
→	1	人	対象	切り込む	メト
	→ 1a	言葉・行動	気持ち	(切り込む) = 損なう	メタ
	→ 1b	人	(レコードに)溝	(切り込む) = 制作する	メタ
	→ 1c	物・地形		(切り込む) = 食い込む	メタ
	→ 1d	音・言葉		(切り込む) = 割りこむ	メタ
	→ 1e	人	元の液体	(切り込む) = 薄める	メタ
→	2	人	対象	切り取る + 整える	メト
	→ 2a	人	物の形	切り取る + 整える + 作る	メト
	→ 2b	人	作品	(切り取る + 整える)	メタ
	→ 2c	人	人員・経費・時間	(切り取る + 整える)	メタ
→	3	人・物	場所	(切断する) + 横断する	メタ + メト
→	3a	音・風	場所・静けさ	(切断する + 横断する)	メタ

3.2. 母語話者に対する心理実験と、それを用いた内省による意味分析の修正

3.1 で見た、意味分析の際に使用した例文をテスト文として用い、ENS に類似性判断テスト (Miller, 1969; 今井, 1993; 森山, 2015) を行った。クラスタ分析の結果は図 1 のとおりである。クラスタ分析によって得られた図を、右から左に見ていくと、30 のテスト文が次第に枝分かれしているように見える。森山 (2015) によると、その枝分かれの際にできた各クラスタが、どのような意味を共有して分かれていくのかを考察することで、意味拡張の内容を知る手がかりを得ることができる。今回の結果は、結合値 3 辺り (図中の縦線) でのクラスタを見る。

ENS のデータはまず、一番右の枝分かれの際、「プロトタイプまたはメトニミー拡張義」か「メタファー拡張義」かによって、大きく二つのクラスタに分かれている。続いて次の枝分かれでは、「メタファー拡張義」が、完全な「切断」からの拡張か、完全には切断しない「切込み」からの拡張かによって、はっきりと二つのクラスタに分かれている。その後、次の枝分かれで、「切断」のクラスタが、単なる「切断」のクラスタと、切断によって、形を整えることを表す「整形」のクラスタに分かれた。「切込み」のクラスタに関しても、切り込んだ形跡がメタファーのもとになっていると考えられる「切込み跡」と、切り込むように割り込むことが、拡張に関係していると考えられる、「割込み」のクラスタに分かれた。このように、最終的には<0, 1, 2, 2a>「プロトタイプ・メトニミー拡張義」、<0a, 0b, 0c>「切断からのメタファー拡張義 (単なる切断の側面)」、<2b, 2c>「切断からのメタファー拡張義 (整形の側面)」、<1a, 1d>「切込みからのメタファー拡張義 (割込の側面)」、<1b, 1c, 1e, 3, 3a>「切込みからのメタファー拡張義 (切込の跡の側面)」の 5 つに分かれた。この結果から、瀬戸編 (2007) の記述は大方、母語話者の心理実験の結果と一致することがわかった。心理実験の結果を踏まえ、修正を加える必要があると判断したのは以下の二点である。まず、内省の段階では、「<0><2>」と「<1><3>」のペアが始めに構成されることは予想されず、<0, 1, 2, 3>からのメタファー拡張義は、各々別のクラスタになると予測されたが、心理実験の結果、「<0>からの拡張義+<2>からの拡張義」と「<1>からの拡張義+<3>を含む<3>からの拡張義」という大きな二つのクラスタができた点である。次に、<3>が<0>からの拡張ではなく、<1>の下位分類になっている点である。この結果から<3>は<0>から直接拡張したというより、<1>から拡張したと考えた方がより現実の使用が理解しやすくなると判断した。そのため、「目標言語での意味をどのように示すか」という課題に対して、次の修正された分析を提案する。修正した 2 点については、表 3 に点線の枠で示す。

表 3 心理実験を踏まえて修正した CUT の意味分析

		主格	目的格	動詞	動機づけ
0		人	対象	切断する	
→	0a	人	流れ・連続	(切断する)=止める	メタ
→	0b	人	関係	(切断する)=やめる	メタ
→	0c	人	対象	(切断する)=サボる	メタ
→	2	人	対象	切り取る+整える	メト
→	2a	人	物の形	切り取る+整える+作る	メト
→	2b	人	作品	(切り取る+整える)	メタ
→	2c	人	人員・経費・時間	(切り取る+整える)	メタ
→	1	人	対象	切り込む	メト
→	1a	言葉・行動	気持ち	(切り込む)=損なう	メタ
→	1b	人	(レコードに)溝	(切り込む)=制作する	メタ
→	1c	物・地形		(切り込む)=食い込む	メタ
→	1d	音・言葉		(切り込む)=割り込む	メタ
→	1e	人	元の液体	(切り込む)=薄める	メタ
→	3	人・物	場所	(切断する)+横断する	メタ+メト
→	3a	音・風	場所・静けさ	(切断する+横断する)	メタ

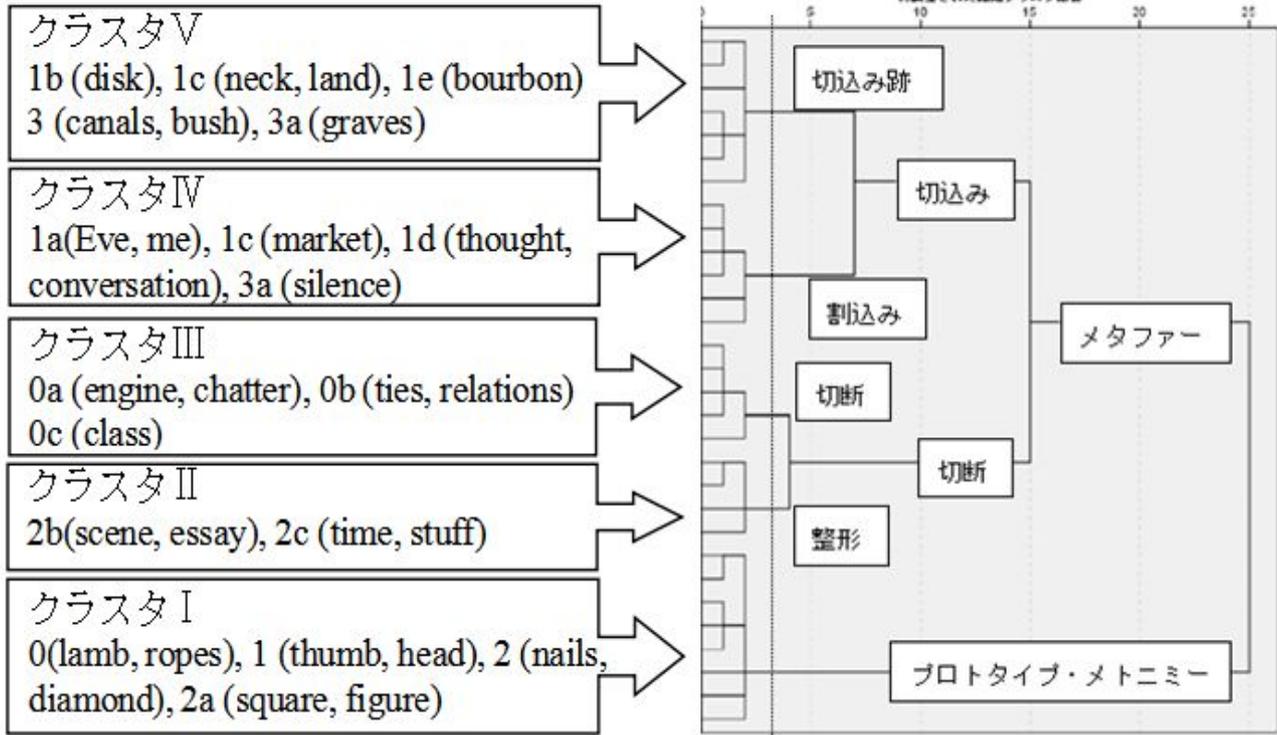


図1 ENSのクラスタ分析

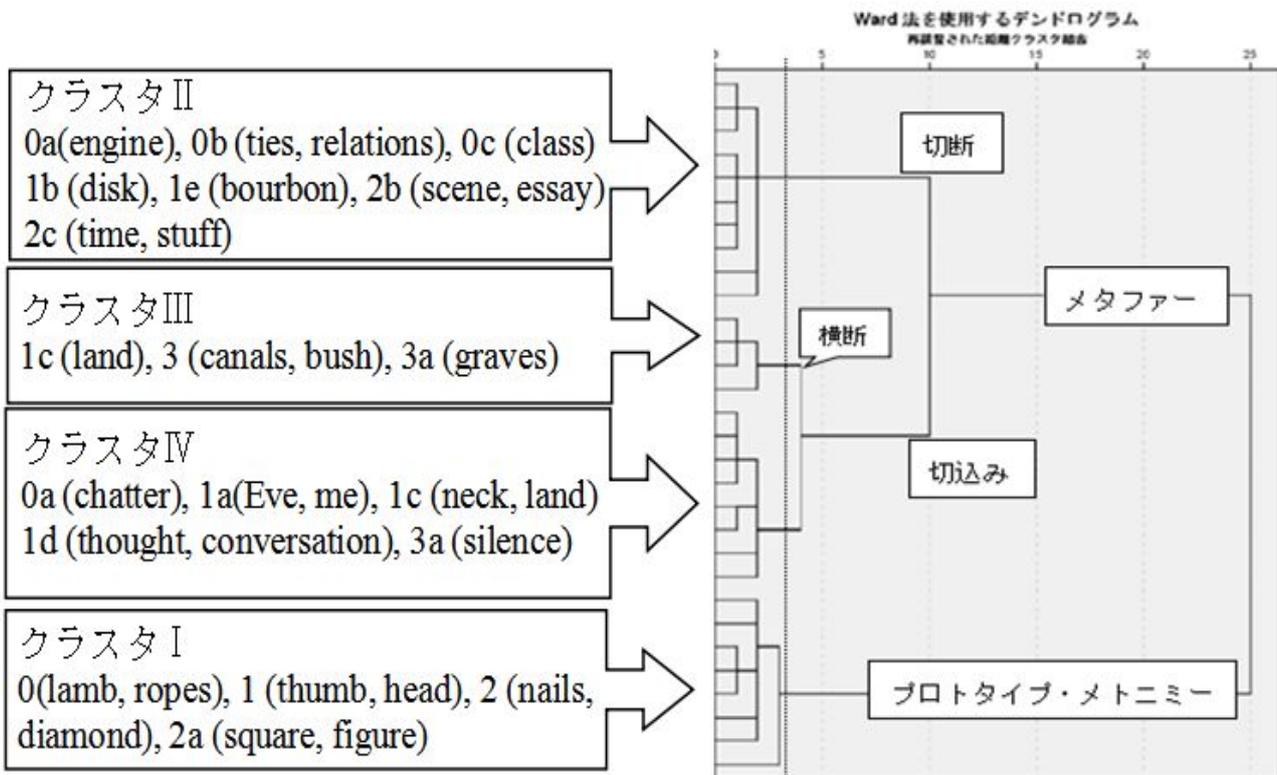


図2 JELのクラスタ分析

4. 母語話者と学習者の CUT の知識は異なるか

次に、JEL に対しても、ENS と同様の類似性判断テストを行い、クラスタ分析を行った。その結果を図 2 に示す。図 1 と図 2 を比較すると、JEL も ENS と同じく、一番大きな枝分かれの際に、「プロトタイプ・メトニミー拡張義」（字義的意味）か、「メタファー拡張義」（比喩的意味）かによる分類を行っていた。この結果は、今井（1993）とも一致する。しかし、次の枝分かれでは、大まかには、ENS のデータと同様に、「切断」からのメタファー拡張のクラスタと、「切込み」からのメタファー拡張のクラスタに分かれたが、ENS のように、はっきりとした分かれ方ではなかった。具体的に見ると、ENS では、「切断」のクラスタであった、<0a> (chatter) が、「切込み」のクラスタに入っていたり、ENS では、「切込み」のクラスタであった、<1b> (disk) や<1e> (bourbon) が、「切断」のクラスタに入っていたりする。最後の枝分かれに関しては、ENS とは全く異なる結果となった。JEL は、「切断」のクラスタに関しては、それ以上細かな分類をすることはなかった。「切込み」のクラスタに関しては、ENS にはない、「横断」のクラスタを形成した。「横断」のクラスタは、<1c> (land) が入っているものの、大まかには<3><3a>がまとまったクラスタになっている。ここでは、L1 の対応語とされる「切る」のメタファー拡張義である、「切るように通る（風を切るなど）」の影響を受けたものと考えることが可能である。「切込み」のクラスタのうち、「横断」以外の部分は、特に分類がなされたわけではなく、未分類であると考えられる。

JEL のクラスタは大まかに、「プロトタイプ・メトニミー拡張義」、「切断からのメタファー拡張義」、「切込みからのメタファー拡張義（横断を引いたもの）」、「横断のメタファー拡張義」の 4 つに分かれた。つまり、大きな分類では、ENS と JEL の分類は近似していたが、JEL は明確な細かな分類はしておらず、また、分類の際に L1 の知識を使用することがあることが示唆された。

5. まとめ

本研究では、まず、瀬戸（2007）をもとにした内省分析と、ENS に対する心理実験の結果から、英語動詞 CUT の意味の示し方について検討した。その後、英語母語話者と、英語学習者の CUT の意味のとりえ方の違いを考察するため、ENS と JEL に類似性判断テストを実施し、その結果を比較した。その結果、今井（1993）の WEAR に関する研究結果と同様に、CUT についても、JEL のデータは、字義的意味と比喩的意味で分けられるという、大きなレベルの分類では、ENS と共通していた。しかし、それよりも細かなレベルでは、ENS のデータほど明確なカテゴリーはできなかった。また、細かなレベルの分類においては、L1 の知識も用いられている可能性が示唆された。JEL は L2 習得において、L2 の知識を身に着けていく。しかし、メタファー拡張義については、ENS と異なり、細かく分類していないことが明らかとなった。今後は、分類の細かさが、実際に、言語使用に影響している言語知識であるといえるのか、また、言語知識として言語使用に影響しているとすれば、どのように影響するのかについて検討したい。

参考文献

- 今井むつみ (1993) 「外国語学習者の語彙学習における問題点」『教育心理学研究』41, 243-253.
瀬戸賢一編 (2007) 『英語多義ネットワーク辞典』, 小学館, 東京.
テイラー, ジョン・R, 瀬戸賢一 (2008). 認知文法のエッセンス, 大修館書店, 東京.
Taylor, John R. (2012) *The mental corpus: How language is represented in the mind*. Oxford: Oxford University Press.
松田文子 (2004) 『日本語複合動詞の習得研究』, ひつじ書房, 東京.
Miller, G. A. (1969) “A psychological method to investigate verbal concepts” *Journal of Mathematical Psychology* 6, 169-191.
森山新 (2012) 「認知意味論的観点からの「切る」の意味構造分析」『同日語文研究』27, 1-14.
森山新 (2015) 「日本語多義語「切る」の意味構造研究-心理的手法により内省を検証する-」『認知言語学研究』1, 138-155.

L2「きる」の意味構造がその習得に及ぼす影響

鐘慧盈
テコラス

1 はじめに

Rosch(1973)では、カテゴリーの内部構造は、「中心義」と、「中心義」との類似度が低減し、「中心義」の周りにある「周辺義」から構成されていると定義した。さらに Rosch(1978)で提示された「プロトタイプ効果」によると、プロトタイプの意味がそのプロトタイプ性が比較的低い語義より習得が早い。

「プロトタイプ理論」の考えに基づき、多義語の習得の説明を試みる場合、多義語のカテゴリー内のプロトタイプ性が比較的低い語義の習得より、プロトタイプの意味の習得が早いという傾向があると考えられる。また、「プロトタイプ理論」と第二言語習得との関係について、Tanaka(1983)では(母語の)言語転移の潜在的な影響にもかかわらず、プロトタイプの項目の習得は一般的に早いと述べられている。以上の仮説が事実だとすれば、プロトタイプ性の習得に与える影響は母語転移に超え、習得順序に大きく関与している可能性がある。

ここで述べているプロトタイプ性の本質は、意味構造におけるプロトタイプの意味からの意味拡張の度合いである。Lakoff は多義語の意味構造に対して、多義語の各語義がプロトタイプの意味から拡張する動機付けに基づいて拡張し、放射状の一つのカテゴリーが形成されるという「放射状カテゴリー」を提案している(Lakoff, 1982; 1987a, b)。このように、意味拡張の度合い、即ちプロトタイプ性は意味拡張の動機付けによって決定されると考えられる。したがって、プロトタイプ性はプロトタイプの意味と拡張義との距離を示すだけでなく、意味拡張の動機付けを反映する意味構造の一つの側面であると考えられる。プロトタイプ性と習得との関係を解明できれば、意味構造が習得に及ぼす影響を垣間見ることが可能となる。

本稿では、中国語を母語とする日本語学習者(以下 CJL)の「きる(切る)」の習得(本稿では「意味理解」を対象にする)を取り上げ、プロトタイプ性との関係を検討することを目的とする。本稿で検証したプロトタイプ性と習得順序の関係、「きる」のプロトタイプ情報を多義語の指導に活用されることが期待される。

2 先行研究

2.1 第二言語習得における習得順序

Shirai(1995)では日本語を母語とする英語学習者(以下 JEL)を対象に「PUT」のそれぞれの別義が JEL にどれほど受容されるかを調べた。その結果、「置く」に直訳できない「PUT」の意味の習得においては、L2 プロトタイプ性の影響を受けている傾向が見られた。Shirai は「置く」に直訳できない「PUT」の意味をさらに「拡張1」と「拡張2」に分類し、「拡張1」(PICTURE : put the picture on the wall)は「拡張2」(HAND : put his hand on his pocket、WATER : put some water in the glass)よりプロトタイプ性が高い意味である。その結果、HAND と WATER の用法は PICTURE の用法より習得されにくいことが明らかになった。なお、「置く」に直訳できる「PUT」の意味が中心の位置を占め、「置く」に直訳できない「PUT」の意味は中心から徐々に拡張していき、周辺へ連続的に変化することが分かる。このように、Shirai(1995)の研究は「プロトタイプ理論」は多義語の習得にも適用していることを支持している。

しかし、英語の「PUT」のプロトタイプの意味と日本語の「置く」のプロトタイプの意味が同じであるから「PUT=置く」と理解されやすいという主張は批判を受けることになる(松田 2004)。「PUT=置く」と理解されやすいのは「PUT」と「置く」のプロトタイプが一致しているからというより、むしろ学習者が辞書などを通して「PUT=置く」を教えられ、「置く」が「PUT」のプロトタイプになってしまうからとい

う理由も考えられるためである。また、学習者の母語によって、必ずしも Shirai(1995)が言う通りの一対一の状況と一致するとは限らず、学習者の母語に一対一の単語が存在しない、また対応語が多数ある場合もある。例えば、本稿で取り上げる日本語単純動詞「きる」の中心義の中国語直訳を探てみると、少なくとも「切(qiē1)」「砍(kǎn3)」「剪(jiǎn3)」という三つの中国語の単純動詞がある。それぞれの意味は以下のようになる：

【切(qiē)】刃物で上から下へ力を入れる 例：切菜(野菜を切る)

【砍(kǎn)】刃物や斧などで力を入れて切る 例：砍树(木を切る)

【剪(jiǎn)】鋏で切る 例：剪发(髪を切る)

このように、CJLの母語において、「切る」のプロトタイプ的意味と一致する対応語が多数存在するため、Shirai(1995)が述べたようにL1における一対一の対応語のプロトタイプによる転移が起きにくいと考えられる。このような場合、L2のプロトタイプ性のみで学習者の習得を説明できるかはまだあきらかにっていない。本稿では一対一の対応関係に適応できないCJLが「きる」を学習する場合を取り上げる。

2.2 「きる」の意味構造

「きる」の本動詞の多義研究は複数挙げられるが、その中に森山(2015)がある。森山(2015)は従来の内省の手法により分析されてきた日本語の多義動詞「きる」の意味構造の妥当性について、心理的手法を用いて検証し、内省分析の結果を補足することを試みた。

森山は、動詞にはその用法によって共起する項が決まっており、動詞の用法とどのような項が共起するかは表裏一体の関係にあるという観点を述べた。したがって、日本語母語話者(以下JNS)が「きる」のある意味のプロトタイプ性を認定する際、暗黙のうちに、その意味と共起する項を考慮しながら、プロトタイプ性の認定を行うと考えられる。森山(2015)ではカード分類法を実施した上で、クラスタ分析を行うことによって、意味間の意味拡張についての情報が得られた。このような心理的手法によって得られた意味拡張の情報と森山(2012)の内省による分析と補い合うことで、より精度の高い意味構造が成立した。

しかし、森山(2015)では構造上、各語義のプロトタイプ的意味からの拡張の度合い(本稿では「プロトタイプ性」とも言う)がまだ明らかになっていない。さらに、プロトタイプ性が習得にどのような影響を与えているかについては森山(2015)の研究の対象になっていない。本稿では、実験1で森山(2015)が提示した「きる」の意味構造における意味拡張の度合いを補足し、実験2で「きる」のプロトタイプ性とCJLが「きる」の各語義に対する受容度との関係を質的に分析する。

3 各語義の内在的関係を補足

3.1 「きる」の各語義のプロトタイプ性(実験1)

意味構造が学習者の習得に及ぼす影響をについて検証するために、本稿では「きる」の意味構造における意味拡張の度合いを補足する。意味拡張の度合いを補足するために、JNSを対象に心理的手法で「きる」の各語義のプロトタイプ性を求めた。

実験1では、JNSに類似性判断試験を行い、多義動詞「きる」の各語義が「きる」のプロトタイプ的意味「糸をきる」とどれほど似ているかについて9段階評価を求めた。得られた類似性をその意味のプロトタイプ性とする。結果を表1の「プロトタイプ性」の項目に示した。

3.2 意味構造における各語義の拡張の度合い

得られたプロトタイプ性の順位を森山(2015)の意味構造に当てはめると、図1のようになる。数字が大きければ大きいほど、その意味が構造上プロトタイプ的意味から離れている。例えば、プロトタイプ性の第3位を占めている[切除]は第5位を占めている[横断]よりプロトタイプ的意味に近いが、第2位を占め

ている[切開]よりプロトタイプの意味から遠く離れている。

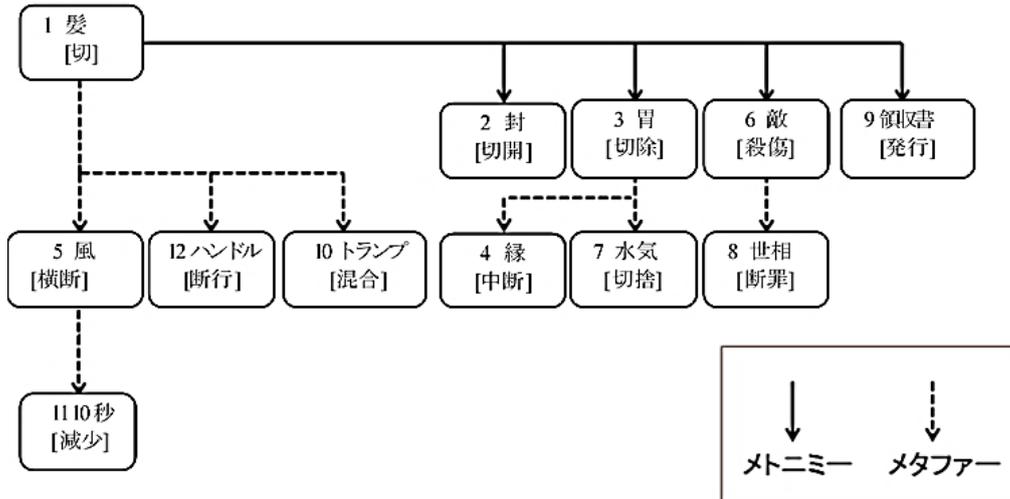


図1 拡張の度合い（プロトタイプ性）を補足した「きる」の各語義の意味構造

図1を見ると、拡張の動機づけと拡張の度合いとの関係には、メトニミー拡張義群がメタファー拡張義群よりプロトタイプの意味に近いという全体的な傾向が見られる。ところが、同じ意味からの同じ動機付けによって拡張した複数の意味には階層がある。例えば、[切開][切除][殺傷][発行]はすべてプロトタイプの意味からのメトニミー拡張義であるが、連続的に拡張していくのではなく、上位層にあるメトニミー拡張義のメタファーによる意味拡張した[中断]の意味がメトニミー拡張義の[殺傷]よりプロトタイプの意味に近い。

4 意味構造が習得に及ぼす影響

4.1 CJLの「きる」の各語義に対する意味理解（実験2）

本稿では、習得の一つの側面—意味理解を取り上げ、実験2ではCJLの多義動詞「きる」に対する意味理解を受容性判断試験で検討した。受容性判断試験で得た「きる」の各語義のCJLの「受容度」を表1に示す。

表1 「きる」の各語義のプロトタイプ性と受容度（並び順：受容度降順）

実験1で用いた用例	実験2で用いた用例	プロトタイプ性	受容度
髪をきる	昨日人気のヘアサロンで髪をきった	6.6	2.9
縁をきる	親友とけんかして、縁をきってしまった	4.0	2.7
水気をきる	茹でた麺はざるに上げて、水気をきってください	1.7	2.6
封をきる	封をきって、中から手紙を取り出す	4.2	2.5
胃をきる	おじさんが胃がんになって、胃をきってしまった	4.0	2.3
敵をきる	将軍が馬に乗って敵をきる	3.2	2.3
10秒をきる	100メートル競走のタイムが10秒をきって、9秒70を記録した	1.1	2.2
トランプをきる	カジノの係りがトランプをきって、お客さんに配る	1.3	2.0
風をきる	競輪選手が風をきって走っている	3.4	1.8
領収書をきる	会計する時、店員に領収書をきってもらった	1.6	1.6
ハンドルをきる	ハンドルをきって右の道に入った	0.5	1.6
世相をきる	彼が風刺漫画でイギリスの世相をきる	1.7	1.4

4.2 プロトタイプ性と意味理解の相関関係

実験 1 で得た「きる」の各語義のプロトタイプ性と実験 2 で得た各語義に対する CJL の受容度の相関関係をピアソン相関係数で調べた。

表 2 プロトタイプ性と受容度の相関関係に関する数値

サンプル	Pearson の相関係数	有意確率 (両側)	サンプル数
プロトタイプ性—受容度	.695*	.012	12

* 相関係数は 5% 水準で有意(両側)である。

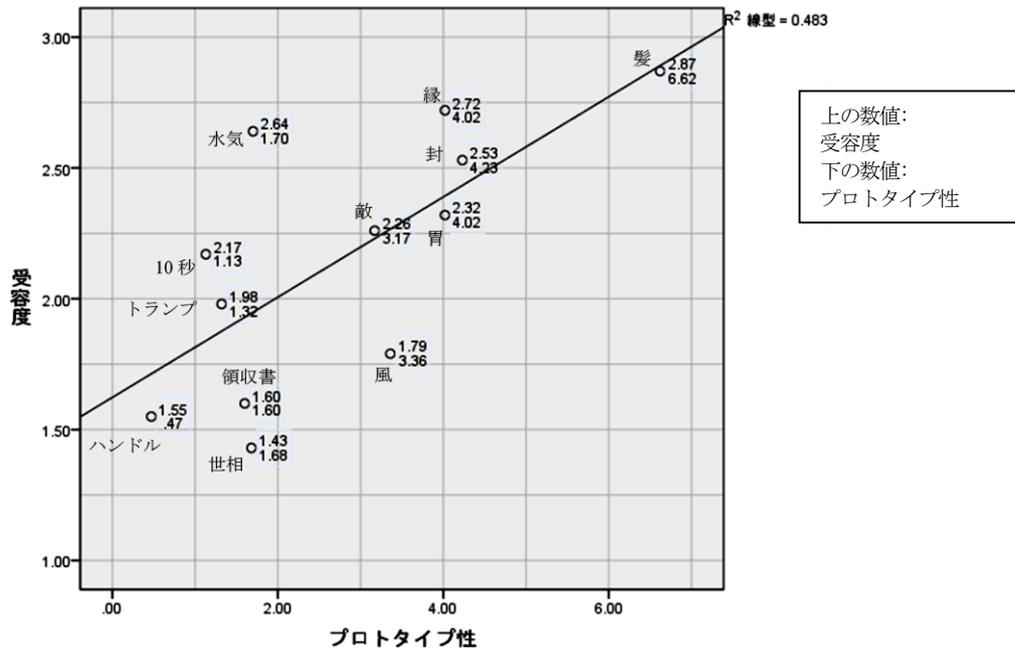


図 2 「切る」のプロトタイプ性と CJL 受容度の相関関係の散布図と回帰直線

その結果が表 2 である。「きる」のプロトタイプ性と CJL の受容度の相関係数は $r=0.695$ 、無相関の検定は $p<.05(p=.012)$ で有意であった。以上のことから、有意水準 α が .05 の場合、二つのサンプルの得点には比較的強い正の相関があることが分かった。図 2 のように、散布図における点 (各語義) の分布が回帰直線に接近し、さらにプロトタイプ性の数値が増加すると受容度の数値も増加するという傾向が見られ、「きる」各語義のプロトタイプ性が高ければ高いほど、CJL に受容されやすいという傾向が見られた。したがって、「きる」のプロトタイプ性は CJL の多義動詞「きる」に対する理解に影響を及ぼしていると考えられる。

また、「きる」の各語義の受容 (表 1「受容度」) と「きる」の L2 の意味構造 (図 1) と比較したところ、以下の二つの傾向が見られた。

- (1) プロトタイプの意味からのメトニミー拡張義と、そのメトニミー拡張義からのメタファー拡張義は比較的受容されやすい

表 1 が示しているように、[中断] (縁をきる)、[切捨] (水気をきる)、[切開] (封をきる)、[切除] (胃をきる)、[殺傷] (敵をきる) は上位を占めている。以上の語義はプロトタイプの意味からのメトニミー拡張義 (以下「メトニミー拡張義」) とプロトタイプの意味のメトニミー拡張義からメタファーによって拡張した語義 (以下「メト→メタ拡張義」) である。

「縁をきる」は人と人とのつながりを分断して切り捨てるという意味を表している。人と人とのつながりは抽象的な線のようにあり、その抽象的な線を切り捨てることから人と人との関係を絶つことに連想できると考えられる。このように、CJL がプロトタイプの意味を用いて、「縁をきる」が理解できた

と考えられる。

「水気をきる」は人間がざるなどの道具や手で物体を振ることによって、物体に付着している水分や水滴を取り除くという動作を表しているが、CJLが水と道具や手とのつながりを「分断」し、その動作と隣接している「捨てる」という動作を表すことが理解できたため、「水気をきる」の受容度が高くなったと考えられる。

「封をきる」は人間がナイフやはさみなどで封筒や袋などの閉じられているものを開けるという意味を表す。ここでは封筒や袋を「分断」する意味で次の動作「開ける」を表している。二つの動作の連続性が高いため、CJLはプロトタイプの意味を用いて「封をきる」理解することができたと考えられる。

「胃をきる」と「敵をきる」は「封をきる」の場合と同様に、「分断してから治療する」と「人間の体の一部を分断して傷つける」が表す前後の動作の連続性が高いため、CJLにとって理解することが容易であったと考えられる。

以上のように、メトニミーという動機付けによって拡張した意味はプロトタイプの意味と緊密に隣接し、また、メト→メタという動機付けによって拡張した意味はプロトタイプの意味から連想しやすいため、この二つの動機付けはCJLにとって比較的理解しやすいと考えられる。

しかし、「領収書をきる」、「世相をきる」も同様にメトニミー/メト→メタによって拡張した語義であるが、「領収書をきる」と「世相をきる」の受容度が比較的低い。

「領収書をきる」について、森山(2015)の指摘のように、刃物で領収書を切ることがなくなり、その代わりに「切り取り線」に沿って切り離すことが増え、このように「切る」という動作も目立たなくなった。このように、「刃物などの道具」は使わなくなり、動作自体が「発行」となり、「分断」の意味も弱まっていると考えられる。故に、CJLはプロトタイプの意味から「領収書を発行する」という意味にたどりつくことが難しいと考えられる。

また、「世相をきる」における「きる」の意味について、森山(2015)では「人が(鋭い言説で)人・社会を批判・断罪する」と記述されている。動作で用いられる道具の「鋭い言説」、動作自体の「批判・断罪」も抽象的な概念を表しているため、CJLはプロトタイプの意味を用いて、「世相をきる」を理解し難しいと考えられる。

- (2) プロトタイプの意味からのメタファー拡張義と、そのメタファー拡張義からのメタファー拡張義は比較的に受容されにくい

表1から[減少](10秒をきる)、[混合](トランプをきる)、[横断](風をきる)、[断行](ハンドルをきる)に対して、CJLの受容度が比較的低いことが分かる。以上の語義はプロトタイプの意味からのメタファー拡張義(以下「メタファー拡張義」とプロトタイプの意味のメタファー拡張義からのメタファー拡張義(以下「メタ→メタ拡張義」)である。

[減少](10秒をきる)は森山(2015)によると、「数や程度を表す線」を「横断」するイメージが「きる」の動作に類似していると言われている。対象物が「抽象的な線」である一方で、その線を「横断」することによって、数や程度の増加ではなく「減少」という意味が表される。故に、CJLがプロトタイプの意味を用いて理解することはやや難しいと考えられる。

[横断]の例文の「風をきる」は人間が風を分断するように逆らって突き進むという意味を表す。「風をきる」の動作には「分断」の意味が含まれているが、空気が分断されても一続きのものであると考えられるため、CJLには風を分断することが「突き進む」を表すことを受け止めにくいため、受容度が低かったと考えられる。

[混合](トランプをきる)は森山(2015)が指摘したように、トランプのカードを混ぜる際、一部のカードを一山のカードに切り込ませるといった動作であると考えられる。しかし、「分断」よりも「混ぜる」という意味が強い。一部のカードを一山のカードに切り込ませた後、カードの形状が元に戻るため、「分断」

という意味と異なる。CJLは[混合]がプロトタイプの意味から拡張した意味として理解できず、故に、「トランプをきる」は非常に低い受容度が得られたと考えられる。

[断行] (ハンドルをきる)は森山(2015)によると、「(人が)力強く瞬間的動作を行う」と記述されている。このように、「ハンドルをきる」にはプロトタイプの意味にある「分断」の意味がなくなるため、CJLにはプロトタイプの意味を用いて「ハンドルをきる」を理解することは非常に難しいと考えられる。

以上のように、メタファー拡張義とメタ→メタ拡張義にプロトタイプの意味に含まれる物理的な対象物が抽象化され、動作が「分断」という意味領域から他の領域に転移したことで、CJLがこのような拡張義にたどりつく手がかりがなくなったため、メタファー拡張義とメタ→メタ拡張義はCJLにとって比較的理解し難いと考えられる。

以上分析したように、メトニミー意味拡張群はメタファー意味拡張群より、プロトタイプの意味からの拡張の動機付けが比較的理解されやすいということが分かった。意味構造における拡張の動機づけが意味理解に影響を与えると考えられる。

5 まとめ

Roschが提示した「プロトタイプ理論」によれば、あるカテゴリーの習得は典型的なメンバー(プロトタイプ)から始まり、徐々に周辺的なメンバーへと拡張していくと言われている。「プロトタイプ理論」に基づく知見を踏まえ、本稿では、中国語を母語とする日本語学習者(CJL)を対象とし、日本語多義動詞「きる」の意味構造がCJLの「きる」に対する意味理解に及ぼす影響を検討した。

その結果、プロトタイプ性が高ければ高いほど、その意味はCJLに受容されやすいこと、受容される順序と「きる」の意味構造を形成させる各語義間の拡張の動機付けを分析してみると、メトニミー拡張義群はメタファー拡張義群より受容されやすいということが分かった。その理由は、メトニミーによって拡張した語義がプロトタイプの意味と緊密に隣接し、CJLはプロトタイプの意味から連想しやすい一方で、プロトタイプの意味からメタファーを介した拡張義のような抽象的な比喩にたどりつくことが難しいためである。以上、習得の一側面の意味理解を取り上げ、CJLの「きる」に対する意味理解が「きる」の意味構造に影響されることを証明した。今後、産出面における意味構造の影響を検討することを考えている。

参考文献

- Rosch, E. (1973) On the internal structure of perceptual and semantic categories. In: Moore, T. E. (ed.) *Cognitive development and the acquisition of language*, 111-144. New York: Academic Press.
- Lakoff, G. (1982) Categories: An essay in cognitive linguistics. In: The Linguistic Society of Korea (ed.) *Linguistics in the Morning Calm*, Seoul: Hanshin Publishing Co.
- Lakoff, G. (1987a) *Women, fire, and dangerous things: what categories reveal about the mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, G. (1987b) Cognitive models and prototype theory. In U. Neisser (ed.), *Concepts & conceptual development: Ecological & intellectual factors in categorization*, 63-100. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tanaka, S. (1983) *Language transfer as a constraint on lexico-semantic development in adults learning a second language in acquisition-poor environments*. Ann Arbor: Univ. Microfilms International.
- 松田文子(2004)『日本語複合動詞の習得研究-認知意味論による意味分析を通して-』シリーズ言語学と言語教育 1, ひつじ書房.
- 森山新(2012)「認知意味論的観点からの『切る』の意味構造分析」『同日語文研究』27, 147-159.
- 森山新(2015)「日本語多義動詞『切る』の意味構造研究—心理的手法により内省分析を検証する—」『認知言語学研究』1, 138-155.